

続模写と偽筆——伝芭蕉筆「洪笠ノ銘」について(上)

本稿は「模写と偽筆——伝芭蕉筆「洪笠ノ銘」について」(TRIO)10号、三重大学人文学部編の続編を意図して執筆したものである。

濱 森太郎

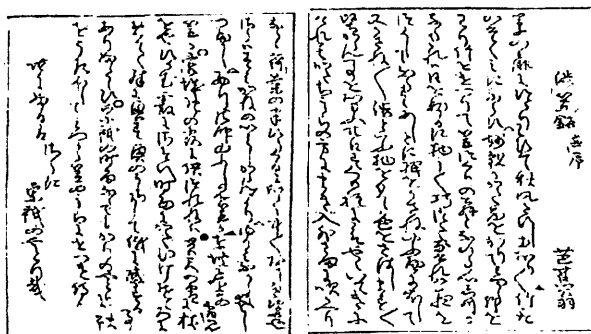
一 はじめに

前稿で取り上げた「伝芭蕉筆「洪笠ノ銘」について、筆者は、それが各務支考編『和漢文操』所収「洪笠ノ銘」に驚く程近似していると述べた。この両者の極端な類似は、両者が直に「写し・写される」関係にあったことを意味し、実際のケースでは両者が同じく芭蕉自筆の原「洪笠ノ銘」を臨模した場合、または、どちらかが他方を臨模した場合が想定されるものである。

では、実際、この「洪笠ノ銘」で起きたことはどちらだったのか。又、伝芭蕉筆「洪笠ノ銘」はいかなる事情で執筆されたものか。その成立事情を考察してみたいと思う。

二 名称と諸本

元禄七(1694)年夏に書かれた松尾芭蕉作「洪笠ノ銘」の写本は多岐にわたるが、まずは焦点となる『和漢文操』所収「洪笠ノ銘」と伝芭蕉筆「洪笠ノ銘」とを表示することから始めよう。





『諸本対照芭蕉俳文句文集』(弥吉哲一、赤羽学他編、261頁)に示された系統図によると、この作品には「笠やどり」「笠はり」「笠の記」「笠張の記」「笠張の説」「洪笠の銘」の名称がある。したがって名称だけでどのテキストかをただちに識別することは困難だが、芭蕉生前の名称だけに的を絞ると、「笠やどり」(岡田知浩氏蔵、芭蕉真筆、注)、^①「笠の記」(小泉家蔵真筆)、^②「笠はり」(河西家蔵懷紙、注)、^③「洪笠銘」(元禄七年成和漢文樓所収)の四種類に限定される。そして後述する理由で、松尾芭蕉の最後の命名は「洪笠銘」だと推定されるために、当面、「洪笠銘」という呼称を用いることも可とする。

次に各テキストの序列は、「笠やどり」(岡田氏蔵)が草案、「笠の記」(小泉家蔵)が初案であり、『思亭』(岱阿等編、宝暦六年序)所収「笠はり」は再案、そして「笠はり」(河西家蔵懷紙)が第三案とされる。ちなみに第三案に酷似した河西周徳編『ゆきまるけ』(元文二年成所収「笠はり」はこの第三案の写しとされている注^④)。

『思亭』所収「笠はり」が再案とされる理由は、この「笠はり」が初案と三案との中間に位置するからである。一方、『諸本対照芭蕉俳文句文集』、『定本芭蕉大成』(尾形他編)、『日本古典文学大系 芭蕉文集』(杉浦正一郎他編)、『日本古典文学全集 松尾芭蕉集』^⑤『井本農一他編』以下では、「洪笠銘」は一樣に、各務支考による加筆の可能性有りとして、保留付きで紹介されている。

三 「笠はり」の系統序列

まず、岡田氏蔵「笠やどり」(芭蕉真蹟)が草案、小泉家蔵「笠の記」(芭蕉真蹟)が初案である点は、本文の語句を改めて対照しても変更はない。次に、再案は『思亭』(俗阿等編、宝暦六年序)所収「笠はり」、そして「笠はり」(河西家蔵懷紙、注4)が第三案とされることには、多少の補足説明が必要かと思われる。そこで、『諸本対照芭蕉俳文句文集』(261頁)に示されたこの系統序列の紹介を先にし、次にその結果を踏まえて各務支考編『和漢文操』巻七「洪笠ノ銘」を検討したい。

『諸本対照芭蕉俳文句文集』(259頁)は「思亭」所収「笠はり」について、次のように言う。これは『ゆきまるげ』『雪団打』所収のものに近いが、部分的に初稿に一致する文面が見られ、結局、再稿によるものと考えられる。一方、第三稿と見られる河西家由来の三本(同家蔵懷紙「ゆきまるげ」所収「笠はり」、『雪団打』所収「笠はり」)は、『思亭』所収のものを更に直しており定稿か」と書かれている(注5)。

そこでこの初案・再案・第三案の「笠はり」を比較すると、三者は共通した形を踏襲して書かれている。まず、三者共に、前書と発句とが一对となる「俳文」形式である。次に三者は共に、住住まいする自称「笠作の翁」が懶い気分で作り始めた笠が出来上がる光景を描いた「序」、出来上がった笠の姿を賞味し、浮かれた気分で旅立ちの喜びを語る「破」、その喜びの中から不意に浮かび上がる旅宿の困窮を嘔みしめる「急」という三部で構成されている。実際の叙述は次のように綴られている。

小泉家蔵真蹟「笠の記」

秋の風さびしき折く妙観が刀」をかり、竹とりのたくみを得て、」たけをさき、たけをたはめて、」みづからかさ作りの翁と名いふ。」たくみつたなけれハ、日をつくして」ならず。こころ静ならざれば、」

日をふるにものうし。朝に」かみをしたゝめて、かはくをまちて」夕にかさぬ。しぶをもてそゝきて」いろをそめ、うるしをほとこして、」かたからむ事をようす。はつか」すぐる程にこそ、やゝいできにけれ。かさのはのなゝめに、荷葉なかば」ひらけたるにゝたるもおかし」きすがたなりけり。なかゝくに」きくのみじきより、猶愛す」べし。かのさいぎやうの」わびがさか、坡翁雲天のかさか。」呉天の雪につえをやひかん。」みやぎのゝ露にやぬれむと、」あられにいそぎ、しぐれにまちて、そゝろにめでゝことに興ず。」興のうちにしてはかに、」感ずるものあり。ふたゝび宗祇」のしぐれにたもとをうる」ほしてみづからかさの」うらにかきつけ侍りけらし。

よにふるも更にそうぎのやどり哉

桃青印

※は改行記号。ゴチックは序・破・急の境。以下同。

『思亭』(岱阿等編、宝暦六年序)「笠はり」

草の扉にひとりわびて、秋風のさびしきおり
 〳、妙観が刀をかり、竹取の巧を得て竹をさき
 竹を枉て、自笠作の翁と名乗る。巧ミ拙けれバ
 日をつくしてならず。心安からされバ、日ふる
 にもものうし。朝に紙をもて張り、夕にほして又』
 はる。洪といふ物にて色を染、いさゝかうるしをほどこして、
 堅からむ事をようす。廿日過る程に
 こそやゝいできにけれ。笠の端の斜に裏に巻
 入、外に吹返してひとへに荷葉の半開るに似
 たり。規矩の正しきより中〳におかしき
 姿也。彼西行の侘笠か、坡翁雲天の笠か。いでや
 宮城のゝ露見にゆかん。呉天の雪に杖をひかん。あ
 られに急ぎ、時雨を待て、そゝろにめでゝ殊に
 興す。興中にして俄に感る事有。ふたゝび宗祇
 のしぐれに袂をうるほし、ミづから笠のうらに
 書付侍りけらし。

よにふるも更に宗祇のやどり哉 ばせを』

※本文は総ルビ。芭蕉の原文にはなかつたはずなので省筆した。

※「」は改行記号。『は改ページ記号。

『ゆきまるけ』(周徳編、元文二年成)「笠はり」

草の扉に独わひて「秋風のさびしきおり」
 〳、妙観が刀を借、竹取の巧を得て、
 竹をさき竹を枉て、自笠作の翁と名乗る。
 巧拙ければ日を尽して』不成。心安からされは日を「
 ふるに懶し。朝に帟を」もて張、夕にほしてまた」
 はる。洪と云物にて色を「染いさゝかうるしをほど」
 こして、堅からん事を「ようす。廿日過る程にこそ」
 やゝいてきにけれ。笠の「端の斜に裏に巻入」外に
 吹返して、ひとへに「荷葉の半開るに」似たり。規
 矩の正しき「より中〳におかしき」姿也。彼西行の
 侘笠か、「坡翁雲天の笠か。いでや」宮城野ゝ露見に
 ゆかん。」呉天の雪に杖を拵ん。」藪に急ぎ、時雨を
 待て」そゝろにめでゝ殊に」興す。興中俄に感る』
 事あり。ふたゝひ宗祇の「時雨にぬれて 自、筆を」
 とりて笠のうちに書付」侍りけらし。

桃青書

よにふるも」更に宗祇の「やとり哉

※「」は改行記号。『は改ページ記号。

再案である『思亭』所収「笠はり」の語句は、河西家藏懷紙、その
 の写しである『ゆきまるけ』『雪団打』の語句と一致するものが多い。
 仮名・漢字の配置、送り仮名まで点検すると、この『思亭』判
 「笠はり」と『ゆきまるけ』判「笠はり」の近似性がよく分か
 る。

仮に両者の違いを一言で言えば、目立っているのは漢字・仮名の相違である。(以下に十四箇所の異同箇所を初案本と校合して表示した。)

初案真蹟「笠はり」 『思亭』「笠はり」

1、かり	かり	借
2、つくして	つくして	尽くして
3、ならず	ならず	不成
4、ものうし	ものうし	懶し
5、したゝめ	張り	張
6、○	又	また
7、ひかん	ひかん	拵ん
8、あられ	あられ	散
9、興のうちにして	興中にして	興中
10、ものあり	事有	事あり
11、しぐれに	しぐれに	時雨に
12、たもとをうるほし	袂をうるほし	ぬれて
13、みづから	みづから	自筆をとりて
14、かさのうらに	笠のうらに	笠のうちに

1から11までは漢字・仮名の相違で、これを見ると漢字を適切に宛てた本文を作成する事が河西家蔵懷紙や『ゆきまるけ』所収「笠はり」執筆の焦点であることが分かる。また『思亭』所収「笠はり」の仮名書きは、大部分が芭蕉真蹟の「笠はり」に由来する事もわかる。

次に12、13、14はやや複雑な変更だが、これが「部分的に初案に一致する文面が見られ、結局、再稿によるものと考えられる」という判断の根拠である。そして、この場合も「興中にして」「宗祇のしぐれに袂をうるほし」という再案本の語句は、初案の語句を踏襲している。この該当箇所を原文の形で引用すると、それは次のようになる。

1、初案 小泉家蔵真蹟

興のうちにしてはかに感ずるものあり。[㊦]ふたゝび宗祇のしぐれにたもとをうるほしてみづからかさのうらにかきつけ侍りけらし。

2、再案 『思亭』「笠はり」

興中にして俄に感ずる事有。[㊦]ふたゝび宗祇のしぐれに袂をうるほし、みづから笠のうらに書付侍りけらし。

3、第三案 『ゆきまるけ』「笠はり」

興中俄に感ずる事あり。[㊦]ふたゝび宗祇の時雨にぬれて、自筆をとりて笠のうちに書付侍りけらし。

再案本「笠はり」と第三案「笠はり」との相違は、先の漢字・仮名の相違一二箇所と、このフレーズの相違一箇所に限られる。ここに現われているのは、表現の推敲努力ではない。その努力を終えて一旦、自家用として保蔵された再案を、例えば公表用に書き直して差し上げるような、表現面の整頓である。したがって、語句の置き換えを重視する推敲上は、マイナー・チェン

ジを意図した「洗練」に相当する。

次に、このフレーズ一箇所の相違に焦点を絞ると、小泉家蔵真蹟の後に『思亭』判「笠はり」が書かれ、次いで『ゆきまるけ』判「笠はり」が書かれた事が推測される。しかしこれを根拠に『ゆきまるげ』判「笠はり」は『思亭』の「笠はり」を下敷きにし、更に修正していると見る事には慎重を要する。

先に一五箇所の異同箇所を上げて述べたように、『ゆきまるけ』判「笠はり」の執筆意図は、例えば公表用本文を意図した漢字仮名表記の整理整頓であつて、その作業中に一箇所、フレーズの修正に手を染めたものと判断される。この一フレーズがなぜ例外的に修正の対照となるかについては、これが芭蕉的な修辭法に関わるフレーズである事を承知する必要がある。

「ふたゝび宗祇のしぐれにたもとをうるほして」は宗祇の時雨の句を思うに付けて涙が袂を潤す事を言つたもので、「宗祇のしぐれに」は「宗祇の時雨の句を思うに付けて」、また「たもとをうるほして」は「涙が」たもとをうるほして、注6が省筆されている。つまり、実際に戸外に降る時雨に袂を濡らす事を意味するわけではないのである。

一方、「ふたゝび宗祇の時雨にぬれて、注7」は、宗祇の時雨の句を思うに付けて、現に、庵室に降る時雨に濡れる気がして、となり、「現に、時雨に濡れる気がして」が省略されている。ここでは芭蕉を濡らす仮想現実の時雨に濡れる実感を取り立てた表現が出現するのである。

しかし、この余りに端的な仮想現実の表現は、芭蕉の特殊な

気質を知る者以外には唐突な表現となる。もちろん、語路が良く言葉の意味の進行が洗練されたものになるので、マイナスばかりが際立つ表現ではない。芭蕉に親しく、句会の開催を通じて幅広く社交生活を営む裕福な武家や町人であれば、顕著に芭蕉の感性を刻印したこの俳文はこのままで捨てがたい逸品となる。例えば、この真蹟「笠はり」を忠実に書写して『ゆきまるけ』を編集した河西周徳（河合曾良の姪に当たる。注8）の実家である「錢屋（河西家、注9）」の様な商家なら、これは打って付けの家宝と言える。

つまり再案と三案との違いは、自家用と贈答用との違いであつて、推敲段階の違いではない。後に文字遣いを分析して言うように、「笠はり」の第三案は、元禄六年頃の染筆と推定される文字遣いで書かれている。そして『芭蕉年譜大成』（今栄蔵著）によれば、元禄四年一〇月二十九日、上方から江戸に帰着して、日本橋橋町の彦右衛門方借家に落ち着いた松尾芭蕉と河合曾良との応答は、元禄五年二月二十日付、近藤左吉宛芭蕉書簡の末尾に「さてさて御懐かしくのみ、折々宗五（※曾良）と御申し出し候」とあり、また元禄五年五月中旬に竣工した新芭蕉庵への移転を機に盛んになる芭蕉の連句会を手掛かりに搜すと、芭蕉と曾良とは、元禄六年四月「風流のまこと」歌仙、元禄六年八月「いざよひは」歌仙、元禄六年九月「十三夜」歌仙、元禄六年冬「松の雪」歌仙、元禄六年冬「雪や散る」半歌仙、元禄七年春「傘に」歌仙と、特に元禄六年に入って頻繁に一座する

事が分かる（注10）。

四 編集者支考

赤羽学氏が言うように、（赤羽学著『雪まるけ』（昭和五〇年四月、福武書店刊）64頁）「洪笠ノ銘」が、河西家蔵懷紙や同文の写しである『ゆきまるけ』所収「笠はり」の影響を受けずに書かれたとは考えがたい。同氏自身が言うように、「洪笠ノ銘」がこれら第三稿のみから影響された箇所は、「巧」「中く」「宮城野の露」「霰」「事あり」「時雨」の六カ所になる。ただし先に検討した「笠はり」末尾の「宗祇の時雨」は、「ふたゝひ宗祇の時雨ならても、かりのやとりに袂をうるほして」と書かれている。この叙述がむしろ再稿に近い文言であるために、同氏は「洪笠ノ銘」は第三稿の影響を受けないで書かれたと見なすのである。ここでは「洪笠ノ銘」は都合六箇所「笠はり」第三稿の影響を受けたが、なぜか、末尾の時雨だけはその影響を排除して書かれていると言う必要がある。

筆者が後に文字遣いによって検証するように、この「笠はり」第三稿は、恐らく元禄六年、松尾芭蕉から河合曾良（または曾良を通じて諏訪の「銭屋」である河西家）に贈答された俳文である。また新芭蕉庵にはすでに自家の保蔵用に再案本の「笠はり」が準備されていた。したがって、この第三稿が芭蕉の手許に保蔵される事はなかった。それにも関わらず、「洪笠ノ銘」の都合五箇所第三稿由来の表現が確認されるのは、第三稿の贈答と前後して、

「笠はり」再案の紙面に簡略な書き入れが残されるからだろう。次には、「笠はり」末尾の「宗祇の時雨」が、「ふたゝひ宗祇の時雨ならても、かりのやとりに袂をうるほして」と書き直される理由が必要である。

各務支考編『和漢文操』巻七「洪笠ノ銘」の末尾には、次のような「評ニ云」が附属する。

此銘は諸集に出て、こゝかしこのたがひめあり。さるは元禄甲戌の夏、伊賀の西麓庵にいまして、文稿一二篇の再校ありしが、此銘もその一篇也。されば遺稿の夜話にいへる、今や故翁の遺文として、傍聞の魚抹は論にたらず。風国が『泊船集』の如きは、落柿舎にたよりて人も信すべけむが、まさにおそるべきは古文のたがひめならん。（中略）滅後の選論は此大事をしるべしとぞ。

ここで支考が言う事を整理すると、「この「洪笠ノ銘」は、芭蕉生前から諸方に授受されたせいで異文が多い。芭蕉の没年にあたる元禄七年夏、伊賀上野の西麓庵に滞在した松尾芭蕉は、十二篇の文章を手直したが、ここに支考が取り上げた「洪笠ノ銘」はその時の修正版の一篇である。それゆえに、遺稿の夜話にも、仮に故翁の遺文と言う時にも、粗略な聞き書きは取るに足りない。例えば京都の医師、伊藤風国が編集した『泊船集（最初の芭蕉全集）』は、西国の俳諧奉行として芭蕉から信頼された向井去来の後見があるため、人も信頼して採用するが、まさに恐るべきは、芭蕉の遺文自体に幾多の語句の相違があることである。芭蕉亡き跡、芭蕉の遺文を取り扱うときに恐るべきは、

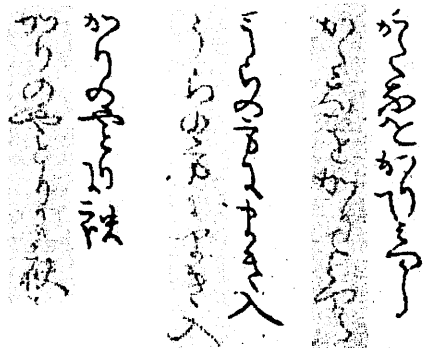
この相互に食違ふ遺文の語句の取捨選択に対処する心得である。」というのである。

また、ここに言う「遺稿の夜話」は、「遺稿」に関わる夜話の意で、『和漢文操』巻四「通夜物語ノ表 渡部狂」の「評二曰」では、「祖翁ノ遺稿トハ、難波ノ遺状ニ「文章ノ反故は杉風ニあり。支考可_レ被_レ為_二点検_一」トアリ」とある。支考が継承した芭蕉の遺稿を踏まえた芭蕉追想が夜話の形で行われていたのだらう。この「評二曰」で取り上げられた「難波ノ遺状」は、松尾芭蕉の遺言状（その一）に「杉風方へ前々よりの発句・文章の覚書、可_レ有_レ之候。支考校_レ之、文章可_レ被_二引直_一候。何も草稿にて御座候。」と書かれた語句をさす。元禄七年夏、芭蕉に侍従し、薪水の労を執った各務支考は、先の「通夜物語ノ表 渡部狂」（渡部狂『各務支考』注11）でも「幻住庵の山居には薪水の労を人にゆずらず。芭蕉庵の撰集には、筆墨の相手にえられ、談言はまして終日にたがはず。」と言う。芭蕉最後の夏、伊賀上野の芭蕉庵（無名庵）で芭蕉を助け、『続猿蓑』の清書者を勤めた上に、西麓庵にて「文稿一二篇」の改稿に立ち会った各務支考は、芭蕉の最晩年の選別眼を知る意味で、「支考可_レ被_レ為_二点検_一」と指定されるにふさわしい経歴を備えていた（注12）。そしてその実績によって、彼は『冬の日』『春の日』『曠野』における山本荷兮、『猿蓑』における向井去来に並んで、『続猿蓑』の編集者の位置を占めたのである。

五 洪笠ノ銘

向井去来編『猿蓑』所収「幻住庵記」の執筆過程で、編集者去来が果たした役割が見過ごしに出来ない事はすでに周知の事実である。それと同じ役割を支考が果たしたとして不思議はない。そこに多少の語句の修正があったとしても、著者の承認が得られるなら、それは著者芭蕉の表現となるだろう。先に引用した「さるは元禄甲戌の夏、伊賀の西麓庵にいまして、文稿一二篇の再校ありしが、此銘もその一篇也。」（「洪笠ノ銘」「評二曰」）と支考が言うとき、それは第四案「洪笠ノ銘」が芭蕉の承認を得た芭蕉の表現だという事を意味する。したがって読者から見て、もしこの芭蕉の作品に、間拔けた冗長や自己顕示が見えるとしても、その責任は芭蕉に帰着すると見なす必要がある。そこで、その心構えをした上で、次の三フレーズを切り取った図版を見て頂きたい。（右『和漢文操』「洪笠ノ銘」、左、「伝芭蕉筆」「洪笠銘」）

- 1, かたなをかりてミつから
- 2, うらの方にまき入
- 3, かりのやとりに袂



右『和漢文操』判「洪笠ノ銘」、左「伝芭蕉筆」「洪笠銘」の漢字・仮名の配置がすべて一致する事は前項に述べた。しかもその仮名文字遣いは、元禄六・七年の松尾芭蕉の仮名文字遣いの特徴を止めている(注13)。したがって、両者が送り仮名や仮名文字遣いの細部まで一致することはもちろんである。その上、実際に同一箇所(陰影を見比べて、字配りや筆運びを点検しても、この両者が写し・写される関係で繋がる事は動かない。可能性を言えば両者が同じく芭蕉筆「洪笠銘」を臨書したか、もしくは、一方が他方を臨模したかである。そして一方が他方を臨模した場合は、『和漢文操』所収「洪笠ノ銘」が「伝芭蕉筆」「洪笠銘」を臨模した場合と、「伝芭蕉筆」「洪笠銘」が『和漢文

操』所収「洪笠ノ銘」を臨模した場合に分けられる。要するに前者である時は両作共に模写であり、後者の時は『和漢文操』所収「洪笠ノ銘」が模写か、伝芭蕉筆「洪笠銘」が模造品となるのである。

六 小さな瑕疵

もし『和漢文操』所収「洪笠ノ銘」が模写となるなら、各務支考の編集者としてのスタンスを占う道標となるだろう。また「伝芭蕉筆」「洪笠銘」が模写なら、原芭蕉筆『和漢文操』所収「洪笠ノ銘」の存在を裏付ける資料になるだろう。

ところで、先に述べた元禄六・七年の松尾芭蕉の仮名文字遣いの特徴となる仮名は「け(介・遣・計)」「す(春・須・寸)」「の(乃・能・農)」「ほ(保・本)」「み(ミ・美)」の五字一三字体である。またゴチックで記した仮名は基本字体、明朝体で記した仮名は補助字体で、その両者が一對の相互関係を形成して用字上の役割を果たす。そしてその特徴に照らすと、『和漢文操』所収「洪笠ノ銘」、「伝芭蕉筆」「洪笠銘」はともに元禄六・七年の芭蕉の文字遣いの特徴を止める文書と判断される(注14)。ただしこの両文の間には、文操本「堂久ミル」↓伝芭蕉本「堂久ミ仁」、文操本「左礼者」↓伝芭蕉本「左礼ハ」の相違がある。また両文に共通する以下十一の仮名文字遣いの特徴がある。①し「之、語中・語尾」、②す「春、基本字体」、③た「堂、語頭」、④は「ハ・者」、⑤ふ「婦、語頭」、⑥み「ミ、基本字体」、⑦め

「免、語頭、⑧り「利、基本字体」、⑨る「留、語尾」、⑩わ「王、語頭」、⑪を「遠、基本字体」。

これらの仮名文字遣いがどれ程、元禄六・七年の芭蕉の文字遣いを反映したものを検証する必要がある。そうすれば、この二つの文書が忠実な書写か否かを判別することが出来るだろう。それは結果として、編集者支考の「点検」の実態を検証することになるのである。

注1、岡田利兵衛著「現時点において知り得る芭蕉最古の書翰と自筆實」（『連歌俳諧研究』46号、昭和49年3月刊）。

注2、河西家は河合曾良の母の実家に当たる。曾良が随行した『奥の細道』における「俳諧書留」以下、曾良の各種の遺稿を保護していた。

注3、曾良の没後、曾良の姪にあたる河西周徳は『ゆきまるけ』と題する曾良の遺稿集を用意したが、その遺稿集に「笠はり」が書写、掲載されている。河西家蔵「笠はり」懐紙の忠実な模写とされる。

注4、ここに言う「河西家蔵懐紙」、周徳筆「ゆきまるけ」、『雪团打』はいずれも赤羽学著『雪まるけ』（昭和五〇年四月、福武書店刊）に影印・翻字が紹介されている。ここでは後の『和漢文換』所収「洪笠・銘」との比較考察の便宜を優先して、『ゆきまるけ』周徳編、元文二年成所収「笠はり」を用いる事がある。

注5、「河西家蔵懐紙」、周徳写「ゆきまるけ」、『雪团打』はいずれも赤羽学著『雪まるけ』（昭和五〇年四月、福武書店刊）によって、容易に点検する事が出来る。同書では河西家に保護されていた松尾芭蕉の自筆懐紙があり、それを書写したものが「河西家蔵懐紙」で、その河西家蔵懐紙をさらに書写して『ゆきま

るけ』所収の「笠はり」が成立する。また『ゆきまるけ』には次の三文字の差異がある。①「巧ミ」の「ミ」が無い。②「中く」の「に」がない。③「笠のうち」を「笠のうら」と書く。赤羽学著『雪まるけ』65頁参照。

注6、「宗祇のしぐれに袂をうるほし」は、実際に降っている時雨に濡れる事ではない。袂をうるおすものは語り手の涙である。この該当箇所を『松尾芭蕉集②』（井本農一他編、小学館刊、241頁）は、「その奥の中にふと感じることがある。それはあの宗祇の、「この世に永らえるということも時雨の雨やどりのようなものだ」という句の心であって、自分もしみじみこの句をくり返し、涙を流すのである。」と解釈している。

注7、「宗祇の時雨にぬれて」とある時は文字通り「時雨にぬれて」と解釈する可能性が出来る。ただし、この文脈はそこで切れずに、さらに、「自ら筆をとりて笠のうちに書付侍りけらし。」と続くので、室内で筆を持ち、笠の裏側に一句を書き付ける場面と解される。このためこの「時雨にぬれて」は半実仮想の表現であり、「……のような気になる」と解する必要がある。なおこのような半実仮想を「直感像」（『心理学辞典』中島義明他編、有斐閣刊）と言い、この直感像の表現を「直感像叙述」という。直感像素質者としての芭蕉の特性を示す表現である。

注8、周徳は河西周徳。河西家は曾良の母の実家。周徳写「ゆきまるけ」の奥書では、曾良を「叔父」と言い、自分は「姪周徳拜書」と署名している。

注9、『続俳家奇人談卷之下』（天保三年七月、和泉屋庄次郎刊）に「信濃の国すハの駅なる銭屋何某（曾良の後）が許に旅宿の折」とある。この当時は旅館か。また周徳写「ゆきまるけ」の奥書の末尾には曾良作の二句

が追加されているが、その内の一句は次のようなものである。

歳暮金持になりて

千貫目ねさせてせはしとの暮

注10、元禄五年五月の新芭蕉庵竣工と同時に恐らく猶子桃印を引き取った松尾芭蕉は、桃印の棄代を稼ぐためにも頻繁に句会を開く必要があった。一方、周徳写『ゆきまるけ』の奥書の末尾に注9のように書き残す曾良には、充分芭蕉に協力する余裕があった。

注11、『和漢文操』は支考の弟子、渡邊狂が編集した体裁で出版された。このため「渡邊狂」は各務支考を意味する。

注12、『和漢文操』巻四「答『五老井』状」では、実際、芭蕉庵二世を誇称する彦根藩士森川許六が各務支考に一書を送って、彼を非難している。その返事である「答『五老井』状」では、校訂における次の五つの要領を上げている。

第一、我家之文章悉可有「虚実之説」事。

第二、「仮」名之叶、韵聊可有「堅横之違」。

第三、和訓之文法尤可有「語路之拍子」事。

第四、有「仮」名真「名」之配」事。

第五、有「表題之取捨」事。

これを読むと、芭蕉が支考に期待したことは、著書における「編集者」の役割を果たす事であることが分かる。

注13、模写と偽筆——伝芭蕉筆「洪笠銘」の銘について『TRIO』10号、三重大学文学部編に述べた。

注14、ただし、「ほ（保・本）」については用例少数のせいもあって「ほ（本）」だけが単独で用いられている。また補助仮字と一対を成す相互関係もない。これ

は重要な相違であるため、次稿で検証する。

「はま もりたろう・本学教員」